

集団内での選択場面における 同調行動と多元的無知について

水口 亜依

(有馬 淑子ゼミ)

問題

人は生きていく中で集団内において選択を迫られる場面があるだろう。ときには自分がその選択を受け入れたくないにも関わらず、「多くの人がこれを選んでいるから」という理由で選んでしまうこともあるかもしれない。例えば限られた時間内で選択を迫られる場面や自分の選択に自信が持てないとき、さらに、それが周りに流され易い人であれば、顕著に見いだされるかもしれない。本研究はこのような仮定に基づき、どのような状況でどのような特性の人が、本心ではない選択をしてしまうのかについて検討しようとするものである。

相互独立的自己観と相互協調的価値観

日本人は同調しやすいと言われる。実験的にはこれを支持する結果もあれば、反証する結果も出ているため、必ずしも確かめられているわけではないが、文化的な価値観として、東洋人は相互協調的価値観を持つとする仮説が呈示されている(Markus& Kitayama, 1991)。

相互協調的価値観とは、自己概念を他者との人間関係から構築することによってもたらされる価値観の一つである。相互協調的価値観の研究として村山(2011)では相互協調性が共有、維持される過程について検討されている。文化的自己感尺度を用いて研究された結果、人々は相互独立的な生き方をより理想的な生き方と捉えつつも、世間一般の人達は相互協調的な生き方をしているだろうと考えられており、自分も相互協調的に振る舞うとされていることが示された。また、その行動が他者から好意的な評価を得られるだろうと考えられていると示唆されている。このような心理的過程は、多元的無知と呼ばれる現象として知られている。

多元的無知

多元的無知とは「集団の多くの成員が、自らは集団規範を受け入れていないにもかかわらず、他の成員のほとんどがその規範を受け入れていると信じている状況」(Allport, 1924; 神, 2009, p.300)である。

多元的無知の研究として、岩谷・村本・笠原(2016)では関係流動性に着目しつつ、集団内の規範遵守のメカニズムについて検討している。関係流動性とは、引越しや転職などに伴って生じるような、人間関係の変化しやすさの指標である。岩本等は、他者からの評判予測が規範遵守に影響を及ぼすとしたうえで規範遵守に伴う良い評判・悪い評判に分けて調査している。その結果、関係流動性が高い群では活動不参加に伴う評判低下の可能性に対する予測と活動参加頻度の間に関係は無かったが、関係流動性が低い群では活動不参加に伴う評判低下の可能性を高く予測する者ほど活動に参加することを見いだした。また、他者が規範逸脱者への評価を低下させる可能性は関係流動性の高低にも関わらず過大に見積もられていることも示された。このことから、関係流動性が低い社会においては人々は相互に規範から逸脱すると他者からの評判が下がる可能性があるかと予測し合うことで規範に沿って振る舞おうとする状態が生じやすいと考えられている。

また、多元的無知について実験を行った岩谷・村本(2017)は、他者の選好に着目し、多元的無知の生起メカニズムを扱っている。この実験では、「不味い水を高品質な水として選択すべし」と認知されるように操作した条件下で、参加者が規範に沿って振る舞う過程が検討された。その結果、規範遵守に関しては他者からの期待に應えるという意味での社会的な面での評価が重要であるのに対し、規範から逸脱する場合には能力評価という面での評価が重要であることが明らかにされている。

る。この結果は、評判予測に関する先行研究(岩谷・村本・笠原、2016)を鑑みると選好と行動の間の乖離を推測する者ほど、自らの評判が下がると予測するために規範を遵守すると考えられる。これらのことから「他者はその選択を好んでいないにも関わらず規範に沿って振る舞っている」と考えている人ほど規範に従う可能性が示唆される。ただし、関係流動性が低いほど、他者の行動基準に従うという線型の関係性が得られるかどうかについては、異なる結果も示唆されている。

心理的距離

山根(1995)は心理的距離を2つの使われ方を定義している。ひとつは物理的距離に対する心理的距離感、客観的な2地点間の空間的距離の心理的射影すなわち認知・記憶された空間的距離としての意味である。もうひとつは、対象との親密感としての馴染み・疎遠感覚としての使われ方である。本研究では後者の定義を心理的距離として扱う。

心理的距離を用いた研究として、佐々木・菅原・丹野(2005)は、場面想定法を用いて、心理的距離近(親しい友人)・中(顔や名前を知っている人)・遠(見知らぬ人)の3水準に対して、羞恥心が逆U字の関係にあることを見いだした。この研究では、羞恥心に逆U字が見いだされた理由は、拒否回避欲求と自己イメージ損傷認知の積とされているが、関係流動性とも関連性があると考えられる。心理的距離の近い友人は、関係流動性の低い、今後つきあう可能性が高い人間関係であるのに対して、心理的距離の遠い見知らぬ人は、今後つきあう可能性の低い、関係流動性の高い人間関係である。羞恥心は、行動基準と現実の自己とのずれとして定義されるものである。そこで、他者の行動基準に従うかどうかについても、非線形関係が示される可能性があるため、中距離条件の導入が必要となる。

本研究では集団状況における心理的距離が個人の選択に影響を及ぼすのか、また、その選択と多元的無知および同調性との関連性を検討する。ここまで述べた先行研究の結果から、次の仮説を立てる。

仮説1 心理的距離が多元的無知および同調行動に影響するだろう。

仮説2 集団の距離が中程度(顔見知り程度の仲)において、最も多元的無知および同調行動が起こりやすいだろう。

仮説3 心理的距離による影響は、相互協調的価値観を持つ個人において、より顕著に見いだされるだろう。

方法

条件

場面想定法による質問紙調査を用いた。

場面想定による条件設定は、場面(レストラン・ゼミ選択・アルバイト)×対人距離(近・中・遠)の3×3被験者内要因計画である。実験参加者を相互協調的自己観で2分割する際には、被験者間要因となる。予備実験で答えにくいとの感想が寄せられたため、質問順番はわかりやすさを重視して固定とした。カウンターバランスは取られていない。

調査対象者および調査期間

京都先端科学大学に所属している大学生37名に対して2020年11月に調査を行った。

質問紙調査の協力を求めた。

男性21名、女性16名、平均年齢20.03歳から得られた回答を分析の対象とした。

手続き

Web上で質問・回答を行うためにMicrosoft Formsにて質問紙を作成し、筆者が個別に配布・回収を行った。また、担当教員に依頼し、質問紙の告知を行い、自由意志による参加を求めた。Web質問紙はメールアドレスやIPアドレスなどを収集しない、無記名形式の設定で行われた。

質問項目

性別・年齢の回答をもとめた後に、社会的距離ごと(初対面、顔見知り、親しい友人)に下記3場面での自己の行動選択と他者の予測を求めた。

レストラン場面

美味しいが時間がかかるメニューA・そこそこの味だが早く出てくるメニューB

ゼミ場面

自分はあまり興味が湧かないが単位を取るの

集団内での選択場面における同調行動と多元的無知について

が易しいゼミ A・自分の興味のある内容だが単位を取るのが難しいゼミ B
アルバイト場面

作業は終わり予定した終了時刻になったが他の人は残っているけど帰る・残る

以上の場面にそれぞれについて、1) 自分の行動の選択 (A または B) 2) 他者の行動の予測「一緒にいた人はあなたと同じ選択をするだろう」3) 他者の許容性認知「一緒にいた人はあなたの選択肢が良いと思っているだろう」4) 他者選択の予測 (自己とは違う選択が選ばれた確率) 5) 他者の考えの予測「自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何とおもうと気にしない」について回答を求めた。最後の項目は、場面想定法における他者ではなく、この質問紙に答えた他の回答者について予想させている。自己と違う選択をした人の独立観を尋ねるもので、高田 (2000) の相互独立—相互協調的自己観尺度の「独断性」を尋ねる項目の1つである「自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何とおもうと気にしない」を使用した。Web 質問紙の一例を画像に示す。

以上の項目をまず対人距離遠条件で3場面で繰り返し、次に対人距離中・近場面を想定させて調査した。最後に、相互独立—相互協調的自己観尺度 (高田、2000) の短縮版を使用した。「人が自分をどう思っているか気にする」、「自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何とおもうと気にしない」、「相手は自分のことをどう評価しているのかと、他人の視線が気になる」、「自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じる場所を守り通す」、「自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる」、「自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける」、「自分の意見をいつもはっきり言う」、「人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い」、「いつも自信をもって発言し、行動している」、「相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある」の計10項目である。「全く当てはまらない」、「ほとんど」、「あまり」、「どちらでもない」、「やや」、「かなり」、「非常に当てはまる」の7件法で回答を求めた。

結果

1 各条件における行動選択確率

初対面条件の各場面における選択確率を、Fig.1に示す。レストラン場面での選択者数は「メニュー A」は11人、「メニュー B」は26人であった。ゼミ場面での選択者数は「ゼミ A」は20人、「ゼミ B」は17人であった。アルバイト場面での選択者数は「帰る」は28人、「残る」は9人であった。レストラン場面では、美味しいが時間がかかる「メニュー A」よりそこそこの味だが早く出てくる「メニュー B」を選ぶ者が多く、ゼミ場面では興味のある内容だが単位を取るのが難しい「ゼミ B」より、あまり興味が湧かない内容だが単位を取るのが易しい「ゼミ A」を選択する者が多い。アルバイト場面では、予定していた終了時間で作業は終了しているが他の人は帰ろうとしないとき、「残る」より「帰る」を選択する者が多い。

顔見知り条件の各場面における選択確率を、Fig.2に示す。レストラン場面での選択者数は「メ

今から【初対面の人たち】との集団の中であなたがどのように選択するかをお伺いします

3. あなたは初対面の人たちと大学の昼休みに昼食をとるためにレストランに来ています。美味しいが時間がかかるメニューAとそこそこの味だが早く出てくるメニューBの2つがあります。あなたは、メニューAとメニューBのどちらを選びますか。

メニューA
 メニューB

4. その選択をした時のあなたの気持ちに最も当てはまる程度の数字にチェックを入れてください

	どちらかとい				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	まあまあ	どちらかとい	かなりそう思
一緒にいた人はあなたと同じ選択をするだろう	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
一緒にいた人はあなたの選択肢が良いと思っているだろう	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

5. この調査を受けている人の中であなたと違う選択をした人は何パーセントいると思いますか。予想される数字を入力してください。

回答を入力してください

6. あなたと違う選択をした人はどんな人だと思いますか

	どちらかとい				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	まあまあ	どちらかとい	かなりそう思
自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何とおもうと気にしない。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

ニュー A」は 15 人、「メニュー B」は 22 人であった。ゼミ場面での選択者数は「ゼミ A」は 19 人、「ゼミ B」は 17 人であった。アルバイト場面での選択者数は「帰る」は 21 人、「残る」は 16 人であった。レストラン場面では「メニュー B」の選択者が多く、ゼミ場面では「ゼミ A」の選択者が多い。また、アルバイト場面では「帰る」の選択者が多い。初対面条件と比較すると、レストラン場面では「メニュー B」、ゼミ場面で「ゼミ A」、アルバイト場面では「残る」の選択者が増加した。

親しい友人条件における選択確率を Fig.3 に示す。

レストラン場面での選択者数は「メニュー A」は 28 人、「メニュー B」は 19 人であった。ゼミ場面での選択者数は「ゼミ A」は 18 人、「ゼミ B」は 19 人であった。親しい友人条件におけるアルバイト場面での選択者数は「帰る」は 9 人、「残る」は 28 人であった。レストラン場面では「メニュー A」、ゼミ場面では「ゼミ B」、アルバイト場面では「残る」の選択者数が多かった。レストラン場

面では初対面条件・顔見知り条件と比べ「メニュー A」の選択者数が、ゼミ場面では「ゼミ B」の選択者数が、アルバイト場面では「残る」の選択者が増加した。

レストラン場面において、対人距離によって選択確率が変わるか Cochran の検定を行ったところ、Cochran の $Q=20.61$, $df=2$, $p<.001$ で有意な選択確率の差が認められた。ゼミ場面において、対人距離によって選択確率が変わるか検定したところ、 $Q=.75$, $df=2$, $p=.69$ であり、選択確率に差は認められなかった。アルバイト場面においては、 $Q=23.1$, $df=2$, $p<.001$ で、有意な選択確率の差が認められた。

レストラン・アルバイト場面における選択確率の変化は似た傾向を示しており、初対面であれば「メニュー B」、「帰る」が選択され、心理的距離が近づくにつれ「メニュー A」、「残る」に推移していくのに対し、ゼミ選択のみ異なる傾向を示しており、選択確率はほぼ等しい値で推移している。

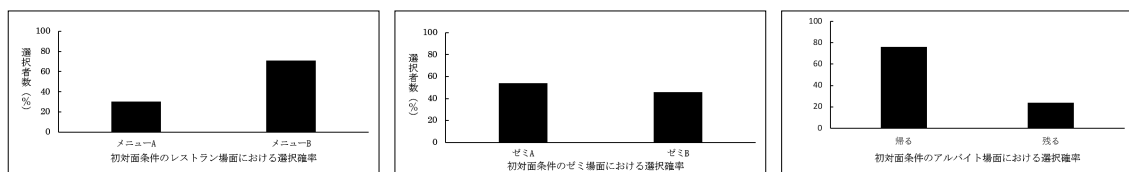


Fig.1 初対面条件における選択確率（左から、レストラン・ゼミ・アルバイト場面）

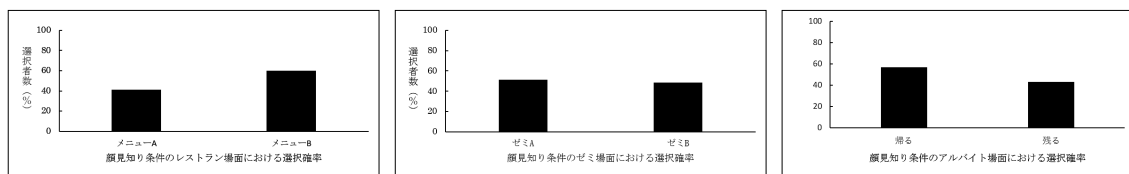


Fig.2 顔見知り条件における選択確率

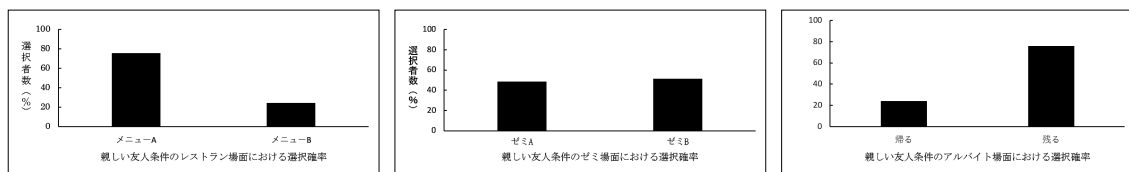


Fig.3 親しい友人条件における選択確率

2 他者の行動の予測

対人距離（初対面、顔見知り程度、親しい友人）×場面（レストランでのメニュー選択、ゼミ選択、アルバイトでの帰るか、残るかの選択）を独立変数とする3×3の被験者内効果で分散分析を行った。

他者の行動予測に対する対人距離と場面の影響を分析するために分散分析を行った。その結果、対人距離では有意な差があった（ $F(2, 70) = 40.839, p = .00$ ）。場面において有意な差はなかった（ $F(2, 70) = .848, p > .05$ ）。対人距離×場面においては交互効果が見られた（ $F(3.115, 109.012) = 4.404, p = .00$ ）。結果をFig.4に示す。この結果から心理的距離が近い関係であるほど、場面によっては一緒にいる人と自分は同じ選択をすると考えられることが示唆された。

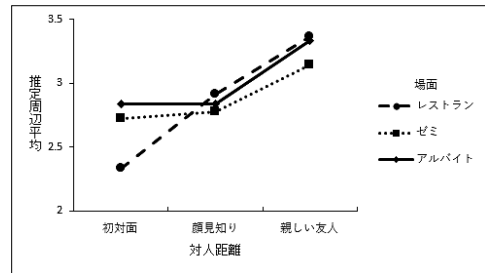


Fig.4 一緒にいた人はあなたと同じ選択をするだろう

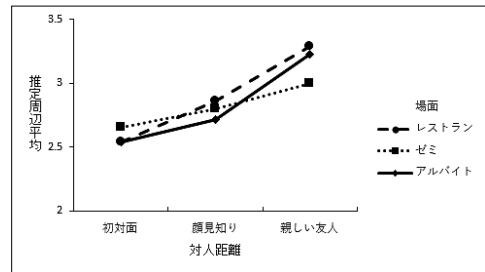


Fig.5 一緒にいた人はあなたの選択肢が
良いと思っているだろう

3 他者の自己に対する許容性認知

許容性認知に対する対人距離と場面の影響を分析するために分散分析を行った。その結果、対人距離では有意な差があった（ $F(2, 68) = 21.927, p = .00$ ）。場面において有意な差はなかった（ $F(2, 68) = .373, p = .69$ ）。対人距離×場面において交互効果は見られなかった（ $F(4, 136) = 1.899, p = .11$ ）。結果をFig.5に示す。この結果から心理的距離が近いほど、自分の選択は良いと思われるだろうと考えられていることが示唆された。

選択確率の予測における対人距離と場面の影響を分析するために分散分析を行った。その結果、対人距離では有意な差がなかった（ $F(2, 72) = .603, o = .55$ ）。場面において有意な差はなかった（ $F(2, 72) = 1.090, o = .34$ ）。対人距離×場面において交互効果は見られなかった（ $F(4, 144) = 2.230, o = .07$ ）。

他者の考えの予測における対人距離と場面の影響を分析するために分散分析を行った。その結果、対人距離では主効果が見られなかった（ $F(1.483, 66) = 2.812, o = .08$ ）。場面においても主効果は見られなかった（ $F(1.624, 53.579) = .590, o = .52$ ）。対人距離×場面において交互効果は見られなかった（ $F(4, 132) = 1.891, o = .13$ ）。最後の項目、他者の考え方の予測については、いかなる条件効果・および自己他者基準の影響は見いだされなかった。

4 多元的無知

多元的無知を検討するために、次の方法で多元的無知の程度を示す指標を算出した。各条件において、他者の選択予測（この質問紙に対して、自己とは異なる選択をした回答者の比率）から、分析1に示された各選択確率を引いた値は、予測が過大に見積もられた値となる。自己とは異なる選択であるため、最初の間でAを選択した実験参加者の場合はBが選択された比率を引き、Bを選択した実験参加者の場合はAが選択されていた比率を引いた。同様に、9条件全てについて異なる選択が過大に見積もられた指標を多元的無知の指標とする。この値がマイナスであるほど、自己と同じ選択を過大に見積もっていたことになる。

この多元的無知の指標に対する心理的距離×場面の分散分析の結果、心理的距離の主効果が見いだされた（ $f(2, 32) = 13.59, p < .001$ ）。結果をFig.6に示す。この結果から心理的距離が近・遠ではプラスの値が出ているため自分とは違う選択をした人が多いと過大に見積もり、心理的距離が中においてマイナスの値が出ているため自分と同じ選択をした人が多いと過大に見積もられていることが示された。

5 相互独立的 —

相互協調的自己観尺度の因子分析・信頼性分析

10項目に対し、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は3.54、1.82、1.14、.96、.81…だったため、2因子構造が妥当であると考えた。また、十分な因子負荷量を示さなかった1項目を分析から除外し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。なお、回転前の2因子で9項目の全分散を説明する割合は46.65%であった。第1因子は6項目で構成されており「いつも自信をもって発言し、行動している」、「自分の意見をいつもはっきり言う」などの項目が高い負荷量を示していた。そこで「自己基準」因子と命名した。第2因子は3項目で構成されており「相手やその場の

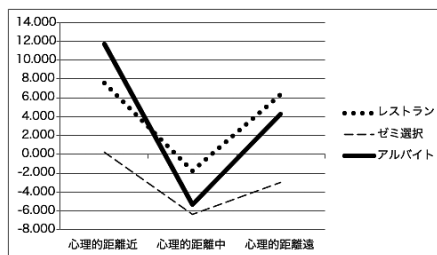


Fig.6 多角的無知に対する心理的距離の影響

Table.1 パターン行列

項目	I	II
いつも自信をもって発言し、行動している。	0.76	0.01
自分の意見をいつもはっきり言う。	0.66	0.2
自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じているところを守り通す。	0.63	0.19
相手は自分のことをどう評価しているのかと、他人の視線が気になる。	-0.58	0.3
自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける。	-0.56	0.13
自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何と思おうと気にしない。	0.47	-0.23
相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある。	0.23	0.93
自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる。	0.03	0.69
人が自分をどう思っているか気にする	-0.29	0.46
	因子間相関	I II
		— -0.36

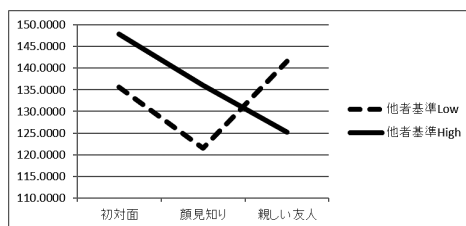
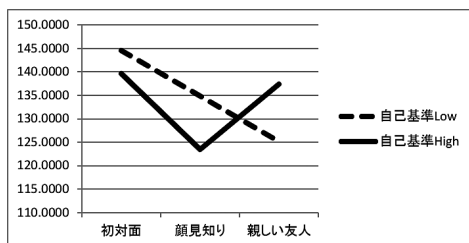


Fig.7 相互協調的自己観の影響

状況によって、自分の態度や行動を変えることがある。」「自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる。」など、内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「他者基準」因子と命名した。次に各下位尺度についてCronbachの α 係数を用いて信頼性分析を行った。「自己基準」因子に関わる6項目は $\alpha = .72$ 「他者基準」因子に関わる3項目は $\alpha = .70$ であった。それぞれの合計点を項目数で割った値を、自己基準得点、他者基準得点とする。パターン行列をTable.1に示す。自己・他者基準得点の中央値でそれぞれの尺度を高群低群に分割した。中央値は、自己基準得点については4点、他者基準得点については5点であった。

6 相互協調的自己観の影響

相互協調的自己観の影響について分散分析を行ったところ、他者選択の予測（自己とは違う選択が選ばれた確率）に対して、他者基準と心理的距離条件との交互効果が見いだされた。対人距離と他者基準の交互効果は $(f(2, 30) = 7.04, p = .002)$ である。その結果をFig.7に示す。場面要因の主効果および交互効果は見いだされなかったため、縦軸は3場面における予測値合計として表示している。

考察

本研究では集団状況における心理的距離が選択に影響を及ぼすのか、その選択と多元的無知や同調圧力との関連性の調査を行い、顔見知り程度の仲が最も多元的無知・同調行動が起こりやすく、相互協調的価値観を持つ人はより顕著に見出されるだろうという仮説を元に検討を行った。

行動選択の結果

自己の行動選択では対人距離による選択確率の変化は、レストラン場面・アルバイト場面において対人距離による選択確率の変化が有意であった。親しくなるほど美味しいが時間がかかる「メニュー A」を選ぶ者が増え、作業は終了したうえで終了時刻を迎えたが他の人は帰らない場合、残ることを選ぶ者が多いと示唆された。このことからレストラン場面では親しい人がいるなら時間がかかるメニューを選んでも待つ時間は気にならないだろうと考える人が多く、アルバイト場面においては親しい人が残っているなら用事もないため自分も残って話に混ざろうと考える人が多いのではないかとと思われる。心理的距離が遠いほど「メニュー B」・「帰る」選択を選ぶ人が多いのはレストランにおいてメニュー A を待つ間なにを話せばいいのかわからず苦に感じる、アルバイトで残ったとしても親しくないから何を話せばいいかわからないうえ残っても仕方がないと思える人がいる可能性がある。顔見知り程度においては初対面と同じく「メニュー B」・「帰る」選択をする者が多いが、「メニュー A」・「残る」を選択する者が初対面と比べて多い。「顔見知り程度なら」と考える人が多い可能性がある。予備実験では「初対面や顔見知り程度の仲ならこれから仲を深めたいと思ひ、残る」という意見も得られた。ゼミ場面において選択確率の変化が認められなかったのは、他の場面と比べ他人との距離を考えながら選ぶという状況が作り出せていなかったからだと思われる。集団内で人気の規範を定めると対人距離による選択関係の変化は現れるのではないかと考える。

仮説の検討

他者の行動予測に対して分散分析を行った結果、対人距離で有意な差が見られ、対人距離×場

面の交互効果が見られた。心理的距離が近いほど自分と同じ選択が予測されている。Fig3 からゼミ・アルバイト場面は線型関係がみられるのに対し、レストラン場面は傾きが異なるため他の場面とは差がある可能性がある。他者の許容性認知についても、心理的距離が近いほど他者は自分の選択を良いと思うと予測していた。このことから心理的距離が影響するとした仮説 1 は支持されるが、推移が直線的であったため顔見知り程度の仲だけで多元的無知・同調圧力が感じられるとする仮説 2 は支持されない。

一方、多元的無知について指標を作成し、心理的距離×場面の分散分析を行った結果、心理的距離の主効果が見出された。心理的距離が中（顔見知り）において自己と同じ選択者の予測を過大に見積もることが示された。また、心理的距離が近（親しい友人）・遠（初対面）においては自己と異なる選択者の予測を過大に見積もることが示された。よって、多元的無知の指標に対しては、仮説 1・2 に関しては支持された。

集団の心理的距離が近いと他の人は異なる選択をすると過大に予測してしまうのは自分と同じ調査を受けている他人との関係が不明瞭なため予想する際に想像が付きづらいと考えられ、知らないから、よく知っているから自分と違う選択をすると予測するのかもしれない。また、顔見知り程度だと過大に自分と同じ選択をするだろうと予測してしまうのは、顔見知りという中途半端な関係であるがゆえにだいたい自分と同じだろうと感じるのではないだろうか。自己基準・他者基準得点を共変量とした分散分析を行った結果、他者の選択予測に対して心理的距離条件との交互効果が見られた。他者基準が高い者は心理的距離が近いほど自分と異なる選択をする者を少なく見積もる。他者基準が低い者は初対面・親しい友人だと自分と異なる選択をした者を多く見積もるのに対し、顔見知り程度の仲では自分と異なる選択をした者を少なく見積もることが示唆された。相互協調自己観の高い人（他者基準が高い人）は、対人距離が近くなるほど同調しやすいが、相互独立的自己観の高い人（他者基準が低い人）は顔見知りの程度で同調行動を起こす可能性が考えられる。他者基準が低い者に対して V 字型の関係を示したのは初対面・親しい友人程度では知らない、あ

るいはよく知っている仲が故に自分は自分、他人は他人と割り切るが、顔見知りとなると中途半端に知っているから予想が難しいのではないかと思われる。以上の結果から、相互協調的自己観を持つ者ほど、他者の基準に従うとした仮説3は支持されなかった。しかし、相互協調的自己観は、他者基準の高低によって自己の選択にはなく、他者の選択の予想に影響する結果が示された。他者基準が低いと他者の選択の予想になぜ影響を及ぼすのか、中程度だとなぜ過大に予測してしまうのか検討の余地はあるため今後は質問項目や場面設定を改めたい。この研究において集団内の心理的距離が選択に影響を及ぼすことを知ることができた。

相互的協調価値観の影響

自己基準・他者基準得点を共変量とした分散分析を行った結果、他者の選択予測に対して心理的距離条件との交互効果が見られた。他者基準が高い者は心理的距離が近いほど自分と異なる選択をする者を少なく見積もる。他者基準が低い者は初対面・親しい友人だと自分と異なる選択をした者を多く見積もるのに対し、顔見知り程度の仲では自分と異なる選択をした者を少なく見積もることが示唆された。相互協調自己観の高い人（他者基準が高い人）は、対人距離が近くなるほど同調しやすいが、相互独立的自己観の高い人（他者基準が低い人）は顔見知りの程度で同調行動を起こす可能性が考えられる。他者基準が低い者に対してV字型の関係を示したのは初対面・親しい友人程度では知らない、あるいはよく知っている仲が故に自分は自分、他人は他人と割り切るが、顔見知りとなると中途半端に知っているから予想が難しいのではないかと思われる。以上の結果から、相互協調的自己観を持つ者ほど、他者の基準に従うとした仮説3は支持されなかった。しかし、相互協調的自己観は、他者基準の高低によって自己の選択にはなく、他者の選択の予想に影響する結果が示された。

今後の検討課題

この研究において集団内の心理的距離が選択に影響を及ぼすこと、また、他者の選択を予測する際に、心理的距離がV字の影響を及ぼすことが

示された。しかし、解釈の余地が残される結果も多い。自己の行動選択では対人距離による選択確率の変化が認められたため集団の距離が選択に影響を及ぼすことは示されたが、他者の選択を付度して選ばれたのかはわからない。今後検討する際は質問項目になぜ選んだのか自由記述欄を設け、他者の選択を付度して選んだのかどうか尋ねる質問項目を増やす必要もあると考える。他者基準が低いと他者の選択の予想になぜ影響を及ぼすのか、中程度だとなぜ過大に予測してしまうのか検討の余地はあるため今後は質問項目や場面設定を改めたい。他者基準が低いと他者の選択の予想になぜ影響を及ぼすのか、中程度だとなぜ過大に予測してしまうのか検討の余地はあるため今後は質問項目や場面設定を改めたい。

参考・引用文献

- Allport, F.H. (1924). Social psychology. Boston: Houghton Mifflin.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 橋本博文 (2011). 相互協調性の自己維持メカニズム
- 岩谷舟真・村本由紀子・笠原伊織 (2016). 評判予測と規範遵守行動の関係：関係流動性に着目して
- 村本由紀子・岩谷舟真 (2017). 多元的無知の先行因についての検討 —他者の選考推測に注目して—
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 (2005). 羞恥感と心理的距離との逆U字的関係の成因に関する研究 1, 2 対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ. *心理学研究* 2005年第76巻第5号 pp.445-452 原著
- 山根一郎 (1995). 対人心理的距離のモデル化 椋山女学園研究論集第26号. 社会学篇
- 高田利武 (2000). 相互独立的—相互協調的自己観尺度. *心理測定尺度集II—人間と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観>*